

# 徳永直の会報

第69号

## 行路難

会長 高木陽助

昨年末親戚の叔父が亡くなった。大正生まれの満九十一歳であった。昭和に育ち、あの第二次世界大戦の中で少年時代を過ごし、戦後の混乱期を農業者として必死に生き抜いてきた。中山間地の恵まれない環境の下で、稲作と和牛の繁殖・肥育を本業として生きてきた。地域の人々からの信頼も厚く、素晴らしい人生であったようだ。

五十年前、いかに生きるべきかに悩む学生のバイブルと言われた本に阿部次郎の『三太郎の日記』がある。理想と現実の矛盾に直面して悩む三太郎の姿を描いた随筆である。哲学的な沈潜など分りもしないのに、少しかじってみたことがある。漱石の『三四郎』でもいかに生きるべきかに悩む青年たちの不安、動揺、孤独、期待などが描かれている。若者たちはこれからの人生を前にして「いかに生きるべきか」悩むものである。

私の先輩は教師になって三年目の夏休みに自らの命を絶った。高校、大学、赴任高校の先輩であり、あらゆることに秀でた素晴らしい能力の先輩であった。夏休み前に生徒とのキャンプ計画を立てたり、大学のゼミ後輩との交流会などいかに楽しそうであった。突然の訃報は誰もが信じがたかった。「行路難」。これが先輩の死後出

### 目次

- ・「行路難」 高木陽助…… p 1
- ・「流言蜚語」 和田崇…… p 2
- ・『妻よねむれ』七〇年によせて」 金野文彦…… p 3
- ・徳永直文学散歩⑩…… p 3
- ・「震災句について」 永田満徳…… p 5
- ・二〇一六年度会計報告（四月～二月）…… p 5
- ・「孟宗忌」案内他…… p 6

された本の題名である。生死は表裏ではなく同居している。

『白い道』の三吉もまたいかに生きるべきかに悩んでいる。

「家のひさしの下に、ひよけのむしろをたらし、三吉は竹のひしゃくをつくりながら考える。

せまい熊本市で、三吉も「喰いつめた」一人であった。新聞社でストライキに加わって解雇され、発電所で、「労働問題演説会」を主催した一人だといので検挙され、印刷工組合の組織に参加すると、もう有名になってしまつて、雇ってくれるところがなくなつていた。仲間の小野は東京へ出奔したし、いま一人の津田は福岡のゴロ新聞社にころがりこんで、ちかごろは袴をはいて歩いているという噂であった。五高の連中も新人会支部のかぎりでは活動したが、組合のことには手をださなかつた。ことに高坂や長野は、学生たちを子供あつかいにした。

最後の場面で、ついに三吉は東京にへゆくことを決心する。

暑い午下りの熱気で、ドキン、ドキンと耳鳴りしている自分を意識しながら歩いている。咽喉のひりつくような白くかわいた道がつづいていた。

## 流言蜚語

和田 崇

おいふざけんな、地震のせいであつた  
うちの近くの動物園からライオン放たれたんだが  
熊本

右の引用は、昨年四月十四日に熊本地震が発生した直後、ツイッターに投稿されたデマである。この投稿はすぐに拡散し、多数のメディアで報道された。七月には偽計業務妨害の疑いで投稿者も逮捕されたため、記憶に新しい人も多いだろう。容疑者は神奈川県在住の二十歳の会社員で、熊本県民でさえなかった。

災害時にデマが拡散するのは、情報不足や被災者が抱える精神的不安により、その真偽を判断することが難しいからである。実際、熊本市動植物園には問い合わせが相次いだそうだ。そして、一九二三年九月に起きた関東大震災では、こうした災害時のデマが朝鮮人他の虐殺という悲劇を生んだ（「他」と書くのは、朝鮮人と間違われた日本人や中国人も含むからである）。

徳永直の「追憶」は、関東大震災直後の東京市下において、朝鮮人虐殺を生んだデマが拡散した様子を描いている。同作品は、震災から約二十三年後の回想で、初出の『文藝春秋』一九四六年十一月号では目次に「創作」と冠されており、その内容を全て事実と認めることはできない。しかし、同僚に「とくなが」と実名で呼ばれる「私」の語りは、当時の様子を鮮明に浮かび上がらせている。

博文館印刷所に勤務していた「私」は、地震によって職場の倒壊にあい、小石川植物園に避難していた。すると二日目の夜、男がやつて来て、「悪漢」の「朝鮮人」が「放け火を」したという趣旨の演説をした。そして、それを信じた人々は、植物園の藪の中にいた「知ってる顔」の朝鮮人たちを襲撃したのだった。

三日目の晩、今度は朝鮮人の襲撃に備えて非常線を張ることになり、夜警につく「私」たちのもとに、五分おきに「てき」の動向に関する「でんれい」が届く。伝令の内容は、戦闘用意、敵の捕獲、爆弾処理と緊迫していくが、待てども爆弾の音は聞こえない。情報の真偽を怪しんだ人々は、出所のわからない「でんれい」の正体を突き止めるべく、非常線を遡行し、「空家らしい家」にたどり着く。すると、「騎兵曹長」がデマを吹聴していたことが判明した。

「忘れぬうちに書いておきたいと心がけながらも「書けなかった」というこの「追憶」は、戦前には発表されなかった。一九三一年に発行されたとみられる『日本プロレタリア作家同盟ニュース第二号』に『作家同盟パンフレット』の広告が掲載され、その「第二篇」の予告内容に「徳永直『震災の記憶』」とある。これが「追憶」の初稿であつたのかもしれないが、結局は刊行されなかった。

近年、直木賞作家の中島京子氏が、『朝日新聞』への寄稿と『週刊金曜日』のインタビューで、徳永の「追憶」に言及している。準備中の短編小説のために終戦直後の出版物を調べる中で見つけた「追憶」の描写から、「関東大震災」と「東日本大震災」を、「治安維持法」と「特定秘密保護法」を「引き比べ」た氏の慧眼には、啓発される人が多い。

徳永直の作品は、現代にもつながる問題を喚起しているのだ。

## 「妻よねむれ」七〇年によせて

宮城 金野 文彦

「妻よねむれ」が『新日本文学』（新日本文学会）創刊号一九四六年三月発行―に掲載されてから、もう七〇年が過ぎた。日本国憲法七〇年とも重なっていることは、この作品の時代的性格を象徴している。

改めて『新日本文学』の原文を読み直してみると、徳永直の新日本文学会創立大会での発言が別に収録されているだけでなく、「序」というべき文があるのに気づかせられた。

――々よ、戦争がうみだしたさまざまな不幸とたたかほう。このたたかひは戦争よりも困難だが、それはきつと人間を賢くし、美しくするだらう。――

徳永にあつては、妻・トシヲを奪った戦争は最大の不幸であり、最大の困難をもたらした元凶である。このことは、日本とアジアの人々にとつても全く同じことである。

当時にあつては、封建的ないしは半封建的な社会とその構造が、戦時体制重要な要素であつた。だが、戦後社会の進展は、前近代的なものを強力に破壊した。肩に跡が残る水運びは、機械の力で解消はしたが、過労死に追い込むような別の長時間労働も生み出した。

「きれいに」システム化され、文字通りゆとりを省き、「自主的に」長時間過密労働へ進む現在の日本社会は、かつての「滅私奉公」とどれだけ違ふのであろうか。効率化された戦時体制ともいふべきか。

彼岸の直にとつては、さぞや歯がゆいに違いない。

だからこそ、本当に人間が賢くなるために、徳永の文学世界を読み直すことが必要であろう。改憲勢力三分の二超の選挙結果後、天皇生前退位報道を聞きながら。

## 徳永直文学散歩⑫

## 『白い道』

一

緒方 宏章

――ほこりつぽい、だからなら坂道がつきるへんに、すりへった木橋がある。木橋のむこうにかわきあがつた白い道路がよこぎつていて、そのまたむこうに、赤煉瓦の塀と鉄の門があつた。鉄の門の内側は広大な熊本煙草専売局工場の構内がみえ、時計台のある中央の建物へつづく砂利道は、まだつよい夏のひざしにくるめいていて、左右には赤煉瓦の建物がいくつとなく胸を反らしている。――

いつものように三吉は、熊本城の石垣に沿うてながい坂道をおりてきて、鉄の通用門がみえだすあたりから足どりがかわつた。門はまだ閉まっているし、



桜橋から跡地を望む



桜馬場から天守を望む

時計台の針は終業の五時に少し間がある。ド・ド・ド……。まだ作業中のどの建物からもあらい呼吸いきづかいがきこえているが、三吉は橋の上を往復したり、鉄門のままで、背の赤んぼと一緒に嫁や娘をまちなかねている婆さんなどにまじって、たっていたりする。手を背にくんで、鍵束の大きな木札をブラつかせながら、門の内側をたいくつそらうに歩きまわっている守衛。いつも不機嫌でいかつくそびえている煉瓦塀、埃ほこりでしろくなっている塀ぞいのポプラ――。

みんなよごれて、かわいて、たいくつであった。やがて時計台下で電気ベルが鳴りだすと、とたんにどの建物からも職工たちがはじけでくる。守衛はまだ門をひらかないのに、内がわはたちまち人々であふれてきた。三吉はいそいで橋をわたり、それからふたたび鉄の門へむかって歩きだす。――きょうはどのへんで逢あうだろうか――。

鉄の門をおしやぶるようにして、人々は三つの流れをつくっている。二つは門前の道路を左右へ、いま一つは橋をわたって、まっすぐこっちへ流れてくる。娘、婆さん、煙草色の作業服のままの猫背のおやじ。あっぱっぱのはだけた胸に弁当箱をおしつけて肩をゆすりながらくる内儀さん。つれにおくれまいとして背なかにむすん

だ兵児帯のはしをふりながらかけ足で歩く、板裏草履の小娘。「ばっぱ女学生」と土地でいわれている彼女たちは、小刻みに前のめりにおそろしく早く歩く。どっちかの肩を前におしだすようにして、工場の門からつきとばされたいきおいで、三吉の左右をすりぬけてゆく。汗のにおい、葉煙草のにおい。さまざま言語尾のみじかいしゃべりやわらいごえ。「バカだよ、お前さんは」「いたいッ」「何がさ？」「……ちゃんによろしく云つといてねッ」――。

わらい声の一つをききつけて、三吉はハツとする。おぼえのあるわらい声は思いがけなくまじかでもう顔をそらすひまもなかった。流れのなかをいくらかめだつたかい背の白浴衣ゆかた地がまむかいにきて、視線があつたとたん、ややあかっぱい頭髪がうつむいた。

(徳永直文学選集)より)

昨年四月の「熊本地震」で、熊本城は甚大な被害を被った。現在、復旧作業が進んでいるが、まだまだ時間を要する。

「熊本煙草専売局工場」跡は、現在は新しい施設を建設中で、更地の状態である。下の地図から当時の位置が分かる。市電は、現在と軌道が異なっている。



花畑公園付近の変遷図

## 震災句について

永田満徳

この度、熊本は未曾有の地震に見舞われて、多くの方が被災された。その地震と被災の状況を俳句として残すことは俳人としての使命ともいべきものである。

当大震災に真に対応しえるのは、こと詩歌に限って言えば、詩でも短歌でもなく、俳句ではないであろうか。俳句が短詩型文芸であるのみならず、「写生」という表現方法にある。

すでに地震の詳細の記録、かつ文学的にも価値の高い文書を書き残している人物がいる。平安末期の鴨長明である。『方丈記』には鴨長明が体験した一一八五年の元暦地震が触れられている。その臨場感あふれる筆致は地震の実態を過不足なく、忠実に、非情とも言えるほどリアリステイックに描き出していて、文学的に記録することの見本を示している。

もちろん、熊本地震については、膨大な公式の報告書が書かれていくであろう。単なる報告であればその報告書で十分である。「天守閣瓦の落ちて樟若葉」「断層の畑を横切る麦の秋」のような状況を報告するだけの俳句では意味をなさない。

俳句という文芸に求められるのはいかなるものであるのか。それは実体験に基づいたところから絞り出されたものと考えられる。

因みに、そういう考えで詠んだ句のいくつかを『俳句界』7月号の「クローズアップ大震災」という特集に発表した。

こんなにもおにぎり丸し春の地震  
春の夜やあるかなきかの地震に酔ふ  
新緑や湯に流したる地震の垢  
体感で当つる震度や夜半の夏  
地震の地を逃れて風の菖蒲かな  
余震なほ耳元で鳴く蛙かな  
「負けんばい」の貼紙ふえて夏近し  
夏蒲団地震の伝ひし背骨かな  
骨といふ骨の響くや首夏の地震  
本震のあとの空白夏つばめ  
深秋の丑三つ刻の震度四  
秋の夜の家もろともに震度四

## 2016年度 会計報告

(2016年4月～12月)

収 入		支 出	
繰越金	131,360	事務費	1,898
会費(31人)	62,000	通信費	10,448
会場解約返金	1,750	総会関連費	3,500
寄付	18,000	熊本文化振興会団体会費	20,000
		HP関連費	0
収入合計	213,110	支出合計	35,846
		残 金	177,264

\*HPの関連費用は、和田崇様のご厚意で支出していただいています。

### 「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。また、徳永直に関する書物・研究・記事等の紹介も行っていきます。「徳永直の会」で検索してください。

### 新規会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

### 住所変更等の連絡のお願い

住所変更等がありましたら、左記までご連絡ください。

T 083-0965 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

### 第四〇回「孟宗忌」のご案内

期日 平成二十九年二月十二日(日)

碑前祭 午後十二時半より、徳永直文学碑前

朗読会 午後十四時半より、くまもと文学・歴史館

総会 午後十六時より、くまもと文学・歴史館

懇親会 午後十七時より、会費四〇〇〇円(予定)

### 「会費納入」について

今年度の会費未納の方、納入お願い致します。